
CAR LOVE LETTER 『i Love Open』

YAS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C A R L O V E L E T T E R 「 i L o v e O p e n 」

【Nコード】

N 7 1 2 2 H

【作者名】

Y A S

【あらすじ】

どうしても寝坊が治せない彼は、速い車に乗れば遅刻を免れると考える。彼が考え付いた答えとは？（テーマ車種：マツダユーノスロードスター（NA6C）、ホンダS2000（AP2））

(前書き)

車と人が織り成すストーリー。車は工業製品だけれども、ただの機械ではない。

貴方も、そんな感覚を持つたことはありませんか？

そんな感覚を「CAR LOVE LETTER」と呼び、短編で綴りたいと思います。

<Theme: MAZDA EUNOS ROADSTER (NA
6C) , HONDA S2000 (AP2) >

電話が鳴っている。

おかしいな。目覚ましのメロディはこの曲じゃないし。
って事は、これは着信か……。

ヤバイ。またやっちゃった！

俺は布団から飛び起き、電話を掴む。

もしもし。枯れた声を悟られない様に、低く、短く、落ち着いて電
話に出る。

しかしそんな努力をよそに、「今起きたでしょお。」、と全てを見
透かし彼女は言った。

「いや、あの、今出る所。」全くのウソだ。

「ふうん。ま、いいわ。お昼は二八庵の海老天付きね。」

待ち合わせから20分も過ぎた時刻の電話だった。

俺は速攻で身支度を済ませ、ロードスターに飛び乗った。

家から駅までの道のりは、この手塩に掛けて育てたロードスターで
も10分は掛る。今日も大幅遅刻確定だ。

彼女とは冬のある日の交通事故が元で知り合った。その時からもう
しばらく経つかない。俺の行動や性格は、大分彼女に見透かされてい

る。

寝坊を治そうと目覚ましを3つも掛け、ベッドからも遠い所に置いているのだが、一向に改善が見られない。

ならば、待たせている彼女の所に早く辿り着けばいいのではないか。

「午後からさ、ちょっと行きたい所があるんだけど。」

ザル2枚と天ぷら盛り合わせをやつつけて、ご満悦の表情でお腹をさする彼女に、俺はそう提案した。

俺のロードスターも、学生の頃から乗り続け、かれこれ10年以上の付き合いだ。色んなところにガタも来ているし、最近の車と比べたら、やはり速さは一歩譲る。

4

ランエボ、RX-7、インプレッサ、スカイライン、スープラ……
いろんな車が頭の中を巡るが、俺としてはやはり屋根が開かない車は物足りない。

屋根が開いて、かつこ良くて、そして速い車。

もう答はひとつだけ。ホンダのS2000だ。

試乗車が置いてある店は少ないんだが、長野ではひとつだけ存在する。

俺達はドライブも兼ねて、ホンダのお店に向かった。

お店では、人の良さそうな中年営業マンが俺達を出迎えてくれた。

ミニバンや小型車の試乗車が店頭に並ぶが、S2000は工場の裏
だと言う。

「乗りに来る人は珍しいですよ。」と言いながら、営業マンは試乗車を取りに行く。

「せっかく天気も良いし、お二人ですから、しばらくぐるっと走って来てもらって良いですよ。」と彼は名刺を俺によこし、「ごゆっくり、でも何かあったらすぐ連絡ください。」と言った。

俺達は遠慮しながら、S2000に乗り込んだ。

革張りのインテリアにデジタルメーター。高級感とスポーティの最強タッグだ。

キーを差し込み、エンジンスタートのボタンを押す。すると高精度高性能のホンダエンジンが、速やか且つ猛々しく目を覚ます。

少年時代をホンダのF1最盛期と共に歩んだ俺にとって、エンジン始動ひとつで脳幹が刺激される。

がっしりとしたクラッチを踏み込み、どしっとしたシフトレバーを1速に押し込む。いつもの感覚でアクセルを踏むと、予想以上に回転が上がる。

こりゃあすごい・・・俺はぞくぞくと武者震いするのを覚えた。

市街地から少しの所の白樺並木のワインディングにS2000を連れて行く。

軽い加速に剛性たっぷりのハンドリング。気付けばメーターは三桁の表示になっている。なのに全く不安感がない。

クーリングではフルオープンでもジャズのハイハットが聴こえる程で、まるでオープンであることを忘れてしまう。

しかしひとたびアクセルを踏み込めば、VTECエンジンの強烈な

咆哮が響き渡り、ジャズクラブから鈴鹿のホームストレートへ、その雰囲気は一変する。

俺にとっても彼女にとっても異次元のオープンスポーツ体験。彼女は「何かすごいね」としきりに上気した表情を見せる。こいつはかなりヤバイ。俺も久しぶりの本物感に酔いしれた。

しばしの官能に触れ、俺達は現実の世界へと舞い戻った。なんとすばらしい車だろうか。

安い車ではないが、数百万円でこの車のオーナーになれるのだから、日本人として生まれた事に感謝してしまう。S2000はそんな車だった。

「よければ、見積もりを作りますよ。あのロードスターは、下取査定させてもらっていいですかね？」

その営業マンの言葉にはっと我に帰る。

下取査定。俺のロードスターが引き取られ、誰かに売られて行く。車を乗り換えるのだから当然なのだが、その言葉の響きが、俺の心にずしりと重くのしかかった。

同時に、俺とロードスターの記憶が鮮やかに蘇る。

大学時代の友達と、夜を徹して峠を走ったこと、自分でクラッチ交換に挑戦したが、作業が難航し、どんどん辺りが暗くなって焦りに焦った事、そして彼女と出逢った冬の日の夜中に、フルオープンで高速を名古屋まで飛ばした事……。ロードスターは俺にとって、ただの車という存在だけではなくなっていた。

駐車場を振り返ると、なんとなくロードスターがつつむいているよ
うな気がした。

「あの、すみません。俺……。」
何故か言葉が出なくなってしまった。

営業マンはそんな俺の気持ちを汲んでくれたのか、優しく微笑み「
そうですね、じゃあ、こちらをお持ち下さい。」と封筒を手渡して
くれた。

中には価格表が入っていない、カタログだけが収められていた。

営業マンに見送られ、ロードスターに戻る俺達。こいつは何も変わ
らず、俺達を出迎える。

「ねえ、何であの車を見に来たの？」
彼女が少し意地悪そうな表情で俺の目を覗く。

そ、それは……、と答えを考えている矢先、彼女が間髪入れずこ
う言った。

「速い車に換えるよりも、早起きだとか、解決する方法はいっぱい
あるんじゃないの〜？」

やっぱり、見透かされてたか。

だが、そう言う彼女が、左手の薬指をさすっていたのを、俺は見逃
さなかった。

なるほど、そう言う解決策もあるか。俺はちよつとだけ、そんな意
識をした。

「ね、今度はアイを見に行こうよ。私もそろそろ車が欲しいなと思

ってるの。」

「よおし！じゃあ、今から見に行こうか！」

俺達はドライブがてら、三菱のお店に向かう事にした。

ロードスターの屋根を開け、彼女に聞こえない様に、風切り音に乗せて口の中で「アイしてるよ」と呟く。

でもそんな事も見透かしているかのように、彼女は助手席でふわりとした笑みを浮かべていた。

(後書き)

本作品は、CAR LOVE LETTER「Open tra
ff ic」の続編に位置します。

同作も併せて読んでいただければ、更にお楽しみいただけると思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7122h/>

CAR LOVE LETTER 「i Love Open」

2010年10月9日01時48分発行